

2021. 10. 12 (火)

コロナ禍で、離れて暮らす両親に 会えない時間が与えてくれた気づき

村田 泰子

はじめに

社会学部で家族社会学、ジェンダー論を教えています、村田です。今日は「希望の力」というテーマのもと、この長いコロナ禍のあいだに感じたこと、考えたことなどを、ざっくばらんにお話してみたいと思います。まずはこの期間、わたし自身の生活がどのように変化したのかを簡単にふり返った上で、ごく個人的な話になりますが、離れて暮らす父親とけんかしたお話をしたいと思います。そして、父とのけんかのエピソードをつうじて、この長い自粛期間にわたしが得た「気づき」のようなものを、「希望の力」に絡めてお話しできたらと思っています。

2020年春、コロナ禍の始まりと
わたしの生活の変化

私にとってのコロナ禍は、去年3月、子どもたちの学校の一斉休校というかたちで始まりました。当時わが家には、小学校、中学校、そして大学にそれぞれ入学する子どもたちがいました。政府は全国の小中学校を一斉休校にすると発表し、兵庫県でも3月3日から休校になりました。4月には、1回目の緊急事態宣言が出されました。それから6

月まで、子どもたちは家にいて、体力とエネルギーを持って余す期間がつかまりました。入学式もなくなりました。長い子育て生活で、初めての経験でした。

そして、じつはこのとき、わたし自身も4月からのイギリス留学を控えていました。大学から1年間の休暇をいただいて行く予定にしていたのですが、イギリスのほうが先にロックダウンをしてしまったため、留学は延期となってしまいました。

そういうわけで、急きょ閑学に戻って授業を担当することになったのですが、閑学での授業の光景もさまざま変わりました。今日ここにいるみなさんの多くは1、2年生だと思うので、過去の授業がどんなだったかを知らないと思いますが、一番大きな変化は、授業が対面からオンラインに切り替わったことでした。

対面授業の大切さに気づく

わたしは閑学に来て12年ほどになりますが、対面でやっているあいだは、それが当たり前過ぎて、それについて考えてみることもありませんでした。今、授業のほとんどがオンラインに切り替わって初めて気づいたのは、対面にはやはり対面にしかない良さと言

うのか、対面だからこそ見えていたものもあるということです。

たとえば、わたしのゼミでは、毎週学生が文献を読んだり調査をしたりして発表をします。むろん、オンラインでも発表はできまし、むしろオンラインだからこそレジュメや資料の共有などがしやすくなったなどの利点もありますが、全人間的なコミュニケーションという意味では、やはり画面越しのやりとりには限界があるように感じています。学生が発表をする際、わたしたちが見たり聞いたりしているのは、ただその発表内容だけではありません。わたしたちは「生身の人間」を目の前にして、その日の目線や顔色、声色、たまたま、服装、それとはなしにつくため息などから、今日は元気そうだなとか、何か心配事があるのではないかなど、さまざまな情報を交換しています。

同じことは、授業の合間などになされる、雑談についても言えるでしょう。ゼミが終わったあとなど、パソコンを片付けていたら誰かしら寄って来てくれて、先生、今度当てられている文献のことですけど、とか、先生、先週遅刻した理由ですけど、とか、あるいはもっとしょうもないことでも、何かしら話しに来てくれるのは、嬉しいものでした。ときにはそうした雑談から、学生の身に起きている、大切な変化に気づかされることもありました。いま、ほとんどの授業がオンラインに切り替わるなかで、改めてそうした交流の大切さを感じています。

そういう意味では、打樋先生がこうして大変な努力をされて対面でつづけてくださっているチャペルの時間も、とても意味があることだと思っています。

実家に帰ることができない

つづいて、このコロナ禍にわたしが経験したさまざまな変化のうち、もっとも深く考えさせられた、実家の父親とのエピソードをお話したいと思います。

はじめにわたし自身の実家との関係についてお話します。わたしは岡山県の岡山市出身で、18歳のとき大学進学を機に岡山を離れ、その後、大阪、京都、イギリスで社会学者になるための勉強をしてきました。関学に就職してからは、ずっと兵庫県に住んでいます。そんなわけで、気づけばいつの間にか、実家で過ごした期間より、実家を出てからのほうがはるかに長くなっていました。

わたしにとっての実家は、ひとことと言えば、「帰るべき場所」です。実家にはだいたい年に2回、お盆と正月に子どもたちを連れて帰りますが、実家に帰ると、両親はいつも上げ膳据え膳で、お日様に干したふかふかの布団で迎えてくれました。子どもたち（両親からみた孫たち）のことも可愛がってくれ、帰省することイコール孫の顔を見せて親孝行することであると、わたし自身、素朴に思っていたところがあります。

ところがコロナ禍により、状況が一変しました。コロナの感染拡大防止のため、県をまたいだ移動の自粛が求められることとなりました。わが家でも、去年の夏まえ、父から電話がかかってきて、今はこのような状況であるから、お盆の帰省はやめてほしいと言われました。そのときは初めてのことであったし、じきにこういう状況も終わるだろうと思っていたので、わたしも素直に従いました。そもそも実家とは言え、今や「他人の家」であることはわたしも承知していましたから、

来るなどと言われるのに無理に行くわけにもいきません。しかし、去年の暮れ、そして今年の夏と、3回目に来るなど言われたときには、さすがにわたしもショックを隠せませんでした。

父の言い分

今年の夏の帰省をやめたほうがいい理由として、父は、いくつかのことを言いました。1つには、兵庫県は岡山県に比べて感染者が多く、とくに西宮市の感染者の多さはニュースでも取り上げられているから、心配していると言いました。また、自分たちは高齢であるため、感染そのものが怖いということも言っていました。それはよくわかります。父は今年傘寿を迎え、4つ下の母は76歳になります。

加えて父は、「近所の目があるから」ということも言いました。父曰く、遠くに住んでいる子どもが、県外のナンバーの車で大挙して帰省してくると、すぐに人目につく、自分たちはもう長くここで暮らして、これからもここで年老いていくのだから、うちだけ県外から子どもを帰らせるようなことはできない、そういうことのように思いました。

この最後の理由を聞いたとき、思わず、そんなしょうもないことを気にするのかと、思わずにはいられませんでした。人生には、もっと大切なことがあるはず。もっと大切なこととはすなわち、子どもであるわたしとの交流や孫との交流です。もっと言えば、親に孫を会わせたいというわたしの気持ちはどうなるのだ、と、内心そんな思いもありました。

ちなみにわたしは3人姉妹の真ん中で、

姉は実家の近くに住んでいます。両親は常日ごろ、近くに住む姉の子たちの面倒を見ている。わたしにはどこか、姉にやきもちを焼いているような、そんな気持ちもあったのだと思います。

父とのけんか

そんなわけで、私は内心不満を感じながらも、ふんふんと父の話を聞いていたのですが、やがて話しているうちに、もともと少し短気なところのある父はだんだんとヒートアップしてきたようで、ついには、今回の帰省には直接には関係のない、ワクチン接種のことについても文句を言い始めました。

父はわたしに対し、そもそもお前たちがワクチン接種をしていないのは、身勝手だと言いました。じつは帰省の話に先立ち、わたしは父に、ワクチンの接種をめぐるいろいろなリスクも指摘されているから、どうか慎重に検討して欲しいと伝えていました。すでに一度目の接種を終えており、二度目の接種を控えていた父はそれが気に入らなかったようで、そもそも医者でもないお前にワクチンについて教えてもらうことなどないと言い放ち、さらには、実家近くに住む姉に対しても、余計なことを吹き込むなどと言われました。

その夜、わたしは久しぶりに、声を上げて泣きました。父のことを想っているのに気持ちが伝わらないことへの苛立ちと悲しみ、そして、恥ずかしながら、わたし可哀想という気持ちだったように思います。

両親との関係性を見直す

では、この話のどこに、「希望の光」を見出すことができるのでしょうか。最後に、今回の騒動を振り返って、わたしが得た「気づき」について、お話しさせてもらいたいと思います。

まず言えるのは、父もわたしも、長引くコロナ禍で疲れていたという単純な事実です。父との会話で、そのことに気づかされました。もともと父とわたしは性格が似ていて、普段からいろいろなことを話します。その際、多少の意見の相違があっても、お互いユーモアをもって流せていたのですが、今回それができなかったのは、やはりお互い、疲れていたのだと思います。事実、いったん感情を吐き出したことで、どこか気持ちが楽になり、そのあとはまた普段通りの調子で話せるようになりました。

また、今回のことをきっかけに、両親との関係性を見直すことにもつながりました。ひとことと言えば、わたしは両親に、甘えていました。お恥かしい話ですが、わたしは実家に帰ると、ろくに家事も手伝いません。普段外で働いているから、夫の実家ではくつろげないからなど、自分勝手な口実をみつけては、家事の手伝いを怠けていました。

しかし、よく考えてみるまでもなく、母ももう高齢です。総勢 10 名を超える集団の世話が、大変でないはずがありません。わたしはそのことに、今までだって気付いていたはずなのに、気付かないふりをしてきました。その気付かないふりをしていたという事実、遅ればせながら気づくことができました。

また、「家族」というものの範囲について、

改めて考えるきっかけとなりました。わたしは家族社会学者でありながら、これまでひどく素朴に、父母と、わたしを含む 3 人の娘たち、そして孫たちたちは、1 つの大きな「家族」だと思ってきました。それは、血縁によって結ばれた、もっとも自然かつ強固な紐帯で、どんなに離れて暮らそうとも、変わることはないと思っていました。でも、その考えは少し、改める必要がありそうです。そもそも実家を出て 30 年になろうとしているわたしが、地元に残る姉と同じ扱いを求めるなど、おかしい話です。おいしいところ取りはできません。

同様に、父が「近所の目」を理由にわたしたちの帰省を拒んだことについても、受け入れる必要があります。父自身も言っていたように、田舎に暮らす父母にとっては、遠くで暮らすわが子よりも、今後もずっと付き合っていく「近所」のほうが大事なのです。

今回、長引くコロナ禍により、このように両親とわたしたち家族とのあいだにすでに生じていた関係性の変化に、気づくことができました。そしてそれを、関係性の断絶と捉えるのではなく、両親も私自身も、年齢を重ねていくなかで、必然的に経験すべき関係性の変化として、前向きに捉えたいと思っています。

今後、実家の両親と会えない期間は、もうしばらくはつづきそうです。そうした状況にあって、両親に今までより少し頻繁に電話をかけたり、LINE を送ったり、また、実家に帰省するにしても、もっと家事を手伝ったり、いっそのこと近くにホテルを取って泊ったりなど、関係性の変化に応じた新しい付き合い方を模索していきたいと思っています。

今日、ここにいるみなさんのなかにも、コ

コロナ禍で、ご両親やご家族との関係性の変化を経験している人は少なくないと思います。わたしと同様に実家に帰れていない人もいれば、逆に、コロナ禍によって一人暮らしを断念し、実家に帰った人もいるかもしれません。その結果、家族との距離が遠くなったと感じている人もいれば、近くなり過ぎたと悩

んでいる人もいるかもしれません。そうした関係性の変化について、これを機会に少し考えてみてくれたらいいかなと思っています。わたしの話は以上になります。ありがとうございました。

(社会学部教授)